



ヒメガマの葉先にとまるチョウトンボ



井の頭池ではかいぼりを軸とした自然再生の取組によってさまざまなトンボが見られるようになった。

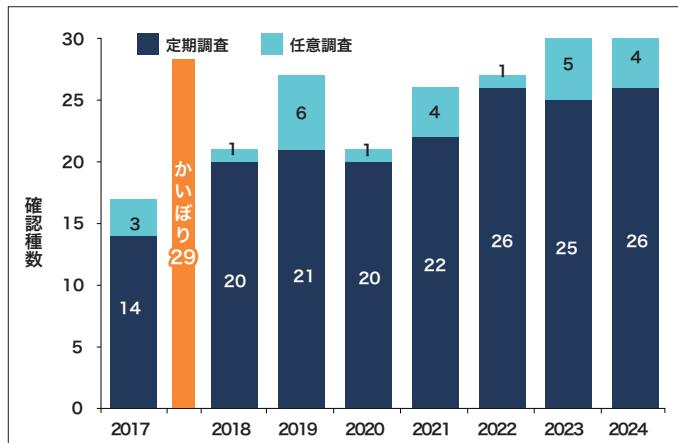


図1. 井の頭池のトンボ確認種数

月1回の定期調査と、それ以外に日常観察の「任意調査」を行った。新たな確認種は、調査回数が多い任意調査で発見されることが多い。個体数が増加すると定期調査でも確認されやすくなる。

井の頭池では、かいぼり後にヒメガマが生育し始めて分布を拡大し、池の数ヶ所にまとまつた茂みを形成した。こうした抽水植物の茂みを好むチョウトンボとコフキトンボの個体数が増加している(図2)。チョウトンボは、青紫色の美しいトンボで、ゆっくり飛翔するので見つけやすい。コフキトンボは、多数の個体が、ヒメガマの葉に並んでとまる様子を見ることができる。

井の頭池では2013年度からかいぼりが3回行われ、在来魚の増加や水質の改善が確認された。また、その際に護岸の前面には生きものの生息場所になる「浅場」が整備・再整備された。アメリカザリガニの防除も現在まで行われている。こうした取組によって生物多様性の回復が進み、さまざまなトンボが生息するようになった。トンボの確認種は、2017年の17種から徐々に増加し、2024年には30種が記録された(図1)。

ヒメガマと共に増加

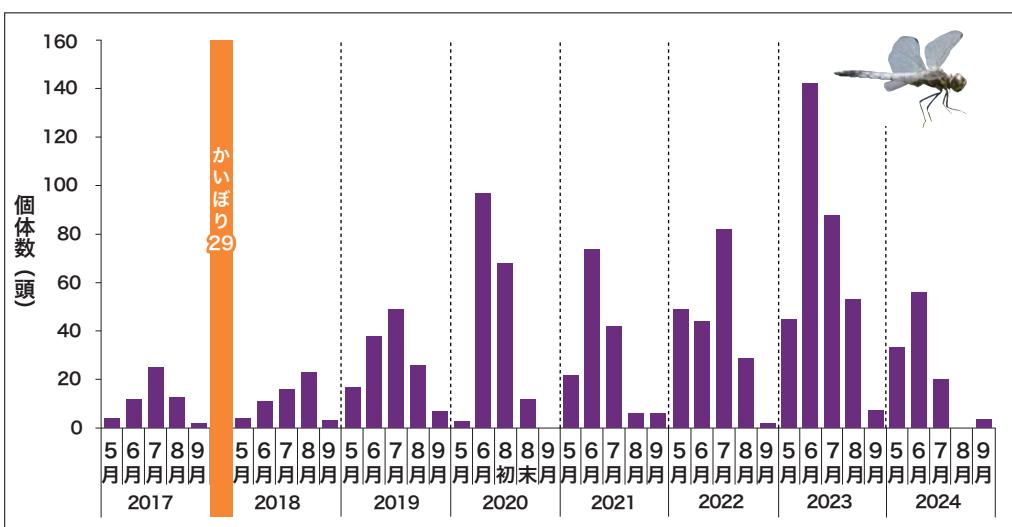


図2. コフキトンボの個体数の推移(2017年~2024年)



▲ヒメガマの葉にコフキトンボが並んでいる光景がよく見られる(写真上)

◀一部のメスはオレンジに横帯が入った美しい翅を持つ(写真左)

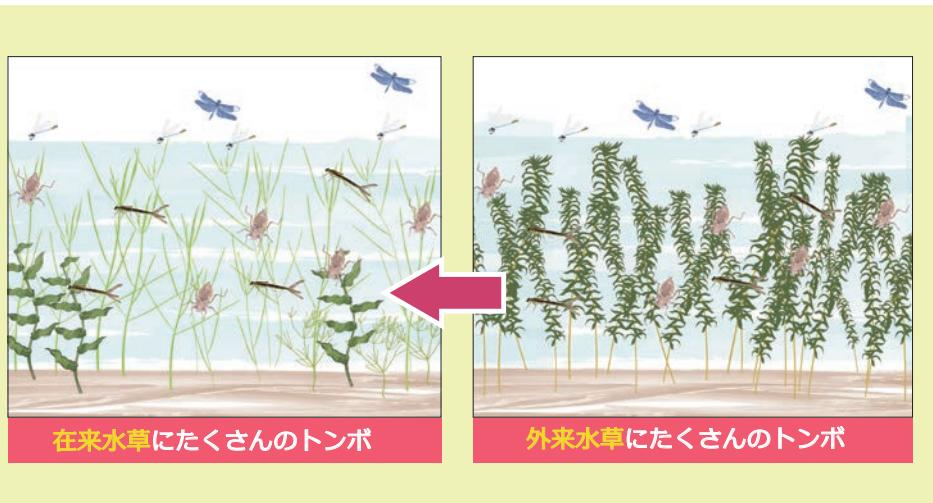
水面に群れるイトトンボ

かいぼり後に個体数が最も増えたのは、イトトンボの仲間である(図3)。沈水植物などの中に産卵する習性があり、ツツイトモが池全体に群生するようになった2019年に、イトトンボが大幅に増加した。多数のイトトンボが、ツツイトモにとまる様子は、圧巻だった。



ツツイトモの上で静止するムスジイトトンボ

図3. イトトンボ類の個体数の推移(2017年~2024年)



イトトンボはコカナダモも利用できるものの、在来水草が繁茂する環境を維持するためには、コカナダモの除去など、在来水草の保全に向けた取り組みを継続することが重要である。

ツツイトモは、イトトンボの増加に寄与しているが、2020年以降は外来水草である「コカナダモ」の繁茂により減少傾向にある。一方で、イトトンボは「コカナダモ」も利用しており、個体数はさらに増加している。

ツツイトモと「コカナダモ」は、池水の透明度などの環境要因によって、年ごとに異なる消長を示しており、それに伴ってイトトンボの個体数も増減している。

イトトンボはコカナダモも利用できるものの、在来水草が繁茂する環境を維持するためには、コカナダモの除去など、在来水草の保全に向けた取り組みを継続することが重要である。

目指している池の姿

湿地とともに増加

かいぼり以前の井の頭池には、水深の浅い湿地環境がほとんどなかつた。かいぼり時に「浅場」を整備・再整備し、それ以降も井の頭かいぼり隊や一般参加イベントによって草刈りや実生木の除去が継続されている。こうした環境整備によって増加したと考えられるのが湿地を好む赤トンボ、マユタテアカネだ。当初は定期調査1回あたり数匹だったが、2020年頃からは10頭以上が見つかるようになっている。

だつたが、2020年頃からは10頭以上が見つかるようになって

トンボから見た池の環境

トンボは種ごとに生息環境の好みが異なる。トンボの生息環境を4つに類型化し、井の頭池で確認された種がどの環境タイプに当てはまるかを整理した。

自然再生の取組が始まつて間もない2018年には、開けた水面を好む種がもつとも多かつた。水草の増加や湿地再生が進んだ2024年には、水草が豊富な池や、湿地を好む種が増加している(図4)。池の環境の改善が進むことにより、水草や湿地を好む種がさらに増加すると期待される。

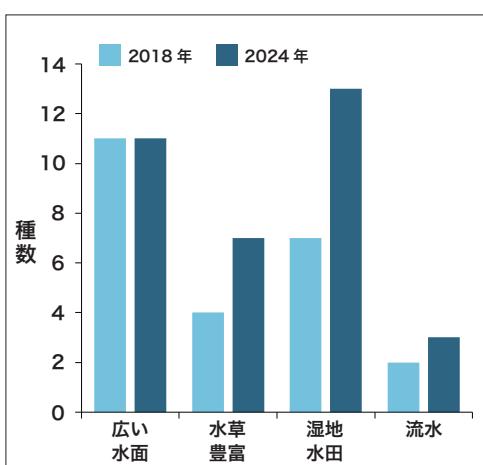


図4. 環境タイプごとのトンボの種数

※種ごとの生息環境は「日本のトンボ」に従つた。
生息環境が2つにまたがっている種はそれぞれの環境に割り当てた。



マユタテアカネ



整備した湿地環境



井の頭池で観察できるトンボの種類や、観察ポイントを紹介したリーフレットを持つてトンボを見てみよう!
公園案内所や池畔のチラシ箱で入手できます。